## 第六項　三心と念仏

証空は領解の心を発したあとは、諸行も阿弥陀仏のためにするのであるから正因となると述べている。それでは善導、法然の言う正定業たる念仏はどのように位置付けられるのであろうか。まず『他筆鈔』巻上の次の文から見ていきたい。

三心領解体。信知自信罪悪。受取仏智修繕三業行也。其行体者顕我等口称
南無阿弥陀仏是也

（『西全』五、三〇七頁下）

このように三心領解の体とは信機信法であり、そこから出る三業の行の行体が口称の念仏であると説明される。このように証空は三心領解したあとの行は念仏に集約されると言うのである。

さらに『同書』巻上の最後の（『西全』五、三二三頁）に、もし仮に三心を具した人が行として弥勒の宝号を専念したら往生できるか、というたとえを出して説明するのであるが、弥陀の本願を信じている人が往生を願いながら弥勒を専念することは、阿弥陀仏に対して間断があって、本願の道理に相応していないために往生できないというのが結論である。このたとえは、これまで諸行も往生の正因であると述べてきたことに対して矛盾があるように思え

る。しかし、それに対する回答が『同書』巻中にある次の文であろう。

至誠。深心。帰命為レ体。回向心又南無義也。此三心所帰。本願名号也。云二阿弥陀仏者即是其行一。即他力行。万行総体故。称無行不成也。将又。此能帰心。即回向義中。兼二自他凡聖世出世善一回向発願願生故。無行不成也

（『西全』五、三三三頁上）

すなわち、三心は帰命の心でありその帰する所は本願の念仏である。それは他力の行であり万行の総体であるから、称すれば必ず往生できるのである。このように他力に帰するから回向して三福が往生の正因となると改めて言うのである。

証空の重要な核となる思想と思われるので『観門義』巻第三からも少し長いがそのまま引用すれば、

三心既具者上三心仏力不思議故。釈二凡夫往生可レ説故一竟。正意得釈意趣一有二三一心凡夫必可レ具道理一故。言二既具一也。無行不成者解浄レ行故三心悟既備行業必可レ成也。其行体阿弥陀仏四字意得往生正行一一切諸行業皆無非一往生教行一得レ心故也。願行既成者。願惣二三心一名也。行一切諸行帰念仏一行一成二唯阿弥陀仏四字一一行也。然願成二南無義一行収二阿弥陀仏一詮釈一顕南無阿弥

（『西全』三、三五四頁）

陀仏六字。釈成決定往生義也

つまり三心領解すればその行は必然的に阿弥陀仏から離れることはないと言い。三心における願行が、念仏の願行に帰すると言うのである。このように諸行が念仏に帰するのである。

ここで一つ特徴的なのは、証空は行具の三心とは正反対に心に正行が自ずから具足するという立場を『他筆鈔』巻上に述べている点である。

落居正因道理正行自具也。正因正行不離法故。而所云正因者三心也

（『西全』五、二九四下～五頁上）

このように証空は領解の心を大切にし、どちらかと言えば法然の智具の三心を発展させたような論理展開をするのである。もちろん智具の三心とは三心の個々の心について解釈することを言っているのであって、領解の心とは異質なものである。しかし心に重心を置き、そこに行の重要性を見出すところに共通性が認められるのである。

### 第七項　平生と臨終の三心

次に証空の言う平生の三心・臨終の三心について検討してみたい。